

## 研究 1

# ICTを活用した不登校児童生徒の支援

～学校における取組を通して～

## 目 次

I	はじめに.....	1
II	研究の概要.....	1
	1 研究の目的	
	2 研究の方法	
III	津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態調査.....	2
	1 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」について	
	2 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」の結果	
	3 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」のまとめ	
IV	ICTを用いた支援方法の検証.....	10
	1 実践例(1) 「クイズのやりとり」	
	2 実践例(2) 「自由研究」	
	3 実践例(3) 「Scratchの活用」	
	4 実践例(4) 「学校の様子を児童生徒へ送る取組」	
	5 実践例(5) 「家庭などでの様子を学校の担任教員に送る取組」	
V	「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の作成.....	15
	1 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」について	
	2 「支援方法カード」について	
	3 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の公開イメージ	
VI	事後アンケートについて.....	18
	1 「事後アンケート」について	
	2 「事後アンケート」の結果	
	3 「事後アンケート」のまとめ	
VII	研究のまとめ.....	19
VIII	引用・参考文献.....	20

## I はじめに

文部科学省が実施した「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、令和3年度の小・中学校における不登校児童生徒数は244,940名となり、1966年度の統計開始以来、過去最多となった。津市においても同調査で令和3年度の小・中学校における不登校児童生徒数が567名となっており、例年、不登校児童生徒数が増加傾向にある。このような状況の中、不登校児童生徒への支援が求められている。

昨年度の筆者の研究では、「津市e-Learningポータル等を用いた不登校児童生徒の学びの保証」というテーマで研究を行い、津市e-Learningポータルを用いた学習に効果が見られ、一つの学習手段として有効であることや、デジタル学習教材（みんなの学習クラブ タブレット）やWeb会議システム（Zoom）、学習支援クラウド（ロイロノート・スクール）などの長所を組み合わせることで、個別最適な学びや協働的な学びの実現につながると結論付けた。

昨年度の研究では、教育支援センターにおいて、それぞれの教育ツールを用いた際の学習効果の検証を中心に行ったが、検証、支援できた不登校児童生徒が教育支援センターに通う児童生徒に限られ、圧倒的多数となる教育支援センターに通っていない児童生徒への支援が今後の課題として挙げられた。そこで、今年度の研究では、昨年度の研究を基に、それぞれの学習ツールの学校現場での活用や学校と不登校児童生徒をつなぐ取組を中心に研究を行い、教育支援センターに通う児童生徒だけでなく、すべての不登校児童生徒がより良い学びをできるような手段や方法の検証を行った。

尚、今回の研究において、不登校児童生徒とは「児童・生徒指導要録」の「欠席日数」欄及び「出席停止・忌引き等の日数」欄の合計の日数により、年度間に30日以上登校しなかった児童生徒のうち何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的理由」、「新型コロナウイルスの感染回避」による者を除く。）と定義した。

## II 研究の概要

### 1 研究の目的

本研究では、津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態を調査するとともに、学校におけるICTを用いた不登校児童生徒に対する支援について考察を行う。また、調査・考察を基に、学校が不登校児童生徒支援を効果的に行えるようにするための「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の作成を行う。

### 2 研究の方法

- (1) 不登校傾向児童生徒の担任に対して、「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」を実施し、その結果を分析することにより、津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態を把握する。
- (2) 研究協力校を中心に、不登校児童生徒支援の実践の検証を行うことにより、それぞれの支援方法の成果と課題について考察する。また、それらの結果を整理し、まとめることで、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の作成を行う。

### Ⅲ 津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態調査

津市においては、令和3年度より1人1台タブレット端末が導入され、活用が進んできている。小学校6年生を対象に行われた「令和4年度 全国学力・学習状況調査 児童質問紙」においても「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」という質問で「ほぼ毎日」及び「週3回以上」と答えた児童の割合(%)が津市において77.8%と全国の58.2%を大きく上回っており、中学校3年生を対象に行われた「令和4年度 全国学力・学習状況調査 生徒質問紙」でも、「2年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」という質問で「ほぼ毎日」及び「週3回以上」と答えた生徒が、津市で82.7%と全国の50.9%を大きく上回っている。同調査において、他のICTに関する設問でも、津市は全国を上回っており、ICTが普及している様子が伺える。しかし、不登校児童生徒にどの程度、ICTが活用されているのかを調べたデータは全国的に見てもなく、津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態もどの程度進んでいるのか分かっていない現状がある。今回の研究では、「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」を通して、その実態を明らかにし、今後の対応に役立てるべく、調査を行った。

#### 1 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」について

津市におけるICTを用いた不登校児童生徒支援の実態を調べるため、「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」を作成し、実施した。

対象は、令和4年度の4月・5月の「不登校傾向児童生徒の状況について」に回答した不登校児童生徒の担任教員178名である。複数の不登校児童生徒を担当している教員には、それぞれの不登校児童生徒ごとに1枚ずつアンケートへの回答を依頼した。そのため、対象児童生徒数は258名となっている。

実施期間は、令和4年7月4日から同15日の12日間とし、実施方法としては、各教員にアンケート用紙を配付し、記入して郵送してもらうという方法をとった。

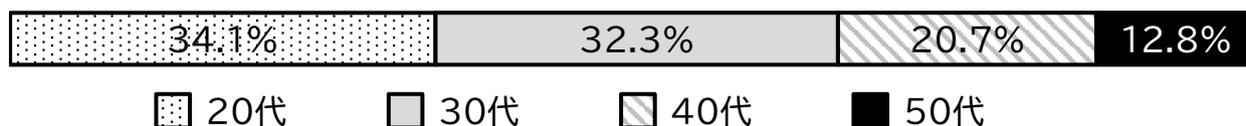
アンケートの設問数は全部で15問となっており、設問(1)～(8)、及び設問(11)は選択式で、設問(9)・(10)、及び設問(12)～(15)は自由記述式となっている。

アンケートの各質問項目、及び選択肢については、結果とともに後述する。

#### 2 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」の結果

アンケートの結果、対象教員178名中164名より回答を得ることができ、回答率は92.1%となっている。また、児童生徒数で見ると、対象児童生徒258名のうち234名分の回答を得ることができ、回答率は90.7%である。それぞれの項目の結果は以下の通りである。

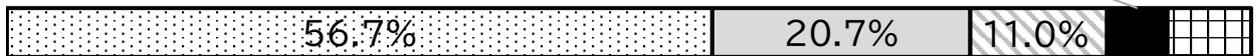
(1)先生の年代を教えてください (n=164)



(2)ICTを使うことは得意ですか (n=164)



(3) 普段の授業や支援でタブレットはどの程度活用していますか (n=164) 4.9% 6.7%



毎日
  2~3日に1度
  1週間に1度
  2週間に1度
  ほとんど使わない

(4) ICT は不登校児童生徒の支援に効果的だと思いますか (n=164) 7.9% 0.6%



とても効果的
  どちらかと言えば効果的  
 どちらかと言えば効果的ではない
  効果的ではない  
 無回答

(5) 当該不登校傾向児童生徒は自宅へのタブレットの持ち帰りをしていますか (n=234)



持ち帰りをしている
  持ち帰りをしていない
  無回答

(6) 当該不登校傾向児童生徒は、学習や学校との連絡等に自宅でタブレット等を活用していますか (n=234) 3.8%



学校のタブレットを活用している
  家庭にあるタブレットやスマホ等を活用している  
 活用していない
  分からない  
 無回答

(7) 現在の不登校傾向児童生徒の様子を教えてください (n=234)



ほとんど毎日登校
  週に2日程度登校  
 定期的に別室登校
  登校できないが連絡は取れている  
 直接つながれていない
  その他  
 無回答

(8)今年度、不登校傾向児童生徒に対して、ICT を活用した支援を行いましたか (n=234)



行った

行っていない

無回答

0.9%

(9) (8)で「行った」と回答された先生にお尋ねします

具体的にどのような支援を行ったかをご記入ください (n=51) (一部抜粋)

- ・ロイロノート・スクールの資料箱に授業の様子や学習プリントの答えを入れた。
- ・ロイロノート・スクールで板書の写真を送ったり、当日の内容やプリントや宿題、明日の予定等を送ったりした。
- ・ロイロノート・スクールで健康観察をした。友だちの様子やメッセージも添えて送った。
- ・タブレットで視覚支援を行ったり、実験などの動画を見せたりした。
- ・Zoomによる授業配信や朝の会、帰りの会を行った。
- ・Zoomを活用して日頃の連絡をしたり、授業への参加をうながしたりした。
- ・国語ではZoomで学級の友だちと音読を一緒にしたり、意見を発表し合ったりした。算数では、合同な図形になる例をロイロノート・スクールで送り、Zoomで説明をした。
- ・クラスの総合的な学習の時間などで自宅からアンケートに回答させた。
- ・健康観察アプリ「リーバー」にて健康観察を行っている。
- ・毎日の授業の板書と日々の予定をロイロノート・スクールにて送信している。
- ・学校で購入しているスマイルネクストのドリルを行ってもらっている。
- ・クラスメイトが生徒間通信を使って、メッセージを送った。
- ・クラスの学習状況や本人が別室で行う学習内容の報告、連絡、相談。
- ・みんなの学習クラブを使用しての復習、動画視聴。
- ・津市 e-Learning ポータルにのせてある学習動画を案内した。

(10)ICT を活用した支援の効果や子どもの様子を教えてください (n=51) (一部抜粋)

- ・児童が自宅で取り組んだプリントを写真に撮って送信することができた。
- ・メッセージのやり取りや、児童が家庭でつくった作品やぬり絵を写真で送ってくれた。
- ・コミュニケーションツールとして利用できた。メッセージに対する反応を実際に会ったときに伝えてくれることもあった。
- ・本人の気持ち次第で配信を見るときもあれば、見ないときもある。
- ・クラブや係決めをスムーズに行えた。
- ・本人とつながりにくい状況があったが、ICTを取り入れたことでほぼ毎日つながることができるようになった。
- ・ノートに書くよりも短時間で学習でき、家庭でも予定がすぐ確認できるのでよかったと言っていた。
- ・学校でどのような学習をしているのか知ることができる安心感があり、いっしょにクラスの子どもが映ることも本人は喜んでいるということを母親から聞いた。
- ・登校したときにスムーズに授業についてくることができている。
- ・タブレット操作には興味があり、進んで活用していた。板書の写真を見て、自らノートに書きこんでいた。

- ・スマイルネクストの方が紙のプリント学習より意欲をもって取り組んでいた。
- ・自分のタイミングで確認することができ、生徒の日課になり、ほぼ毎日つなげている。
- ・心配事や悩みの相談をすることができた。学習でつまずいているところの復習ができ、学習に取り組みやすい。
- ・母親が見て、学習進度を確かめている。2度ほど家庭での様子が写真で送られてきた。
- ・家庭や教育支援センター、習いごとなどで取り組んだ課題を写真に撮って送ってくれた。
- ・他の児童と交流がもててうれしいと話していた。
- ・学校の様子は伝わっているようだが、与えられた課題の提出はやる気の面で難しい。
- ・勉強に気持ちが向かず、タブレットの使い方が分かっているけど使っていない。
- ・家庭で学習することができていないため、タブレットで課題を提出してきたことはない。学校へ登校できた時には、タブレットを活用して学習している。
- ・学習への拒否反応が強く、本人は見えていない。ICT授業の苦手も不登校の要因の一つになっている。

(11)(8)で「行っていない」と回答された先生にお尋ねします (n=181)

今後、ICTを活用した不登校児童生徒支援を行いたいと思いますか



(12)(11)で「行いたい」、「行いたいのが難しい」、「行いたくない」と回答した理由を教えてください (n=181) (一部抜粋)

①「行いたい」と回答した教員 (n=48)

- ・双方向やりとりができるため、ロイロノート・スクールを活用するのが有効だと考える。
- ・学習支援につなげていきたいため。
- ・直接学校関係者とは会いにくいという気持ちがあるので、ICTを使用して何かしらつながりをもちたいから。
- ・本人が理科・社会で受験に不安があるため。
- ・板書をノートに写すことが難しく、タブレットを使って視覚支援や補助ができればと思っている。また、タブレットだと本人のやる気が上がると考えられるため。
- ・定期的な家庭訪問などで直接会うことが難しい生徒に対して、つながる手段の1つとして活用することができると考えられるから。
- ・学習保障だけでなく、児童と連絡を取りやすいから。
- ・学校に来にくい生徒もICTを活用することで学習を保障することができるから。

②「行いたいのが難しい」と回答した教員 (n=118)

- ・ローマ字打ちが苦手ということや学習に対する拒否反応があるため。
- ・ロイロノート・スクールだけでは学習保障が難しいと考えるため。
- ・本人と連絡を取ることが難しい状況にあるため。
- ・本人がタブレットを使う気がないため。
- ・本人の学習意欲がないため。
- ・より学校に登校できなくなる可能性や、家庭で協力が得られない可能性があるため。

- ・自宅でのタブレットを学習目的以外で児童が使用する可能性が高いため。
- ・家庭環境により保管が困難なため。
- ・分からないところが多く、直接のフォローを必要とするため、家庭訪問等が必要。
- ・本人の体調のため、自宅での学習が困難であるから。
- ・保護者が自分の子どもがタブレットを壊してしまうことを恐れている現状があるため。
- ・不登校生徒のためだけの課題を作成するための時間が確保できないため。
- ・ICTを活用するための教材研究の時間が少ないため。
- ・対人関係で悩んでいる子どもには効果があると思うが、勉強面で嫌がる子どもに効果的に使えるか不安なため。
- ・ICT や学びの前に生活、ライフスキル、ソーシャルスキルを優先する必要があるため。
- ・ICT よりも直接のつながりの方が、今の本人にとって重要だと考えるため。
- ・家庭にネット環境がないため。

### ③「行いたくない」と回答した教員 (n=15)

- ・学習意欲がないため、タブレット学習を行っても意味がないと思うから。
- ・当該不登校児童生徒は自宅での学習を望んでいないため。
- ・ICT の活用で効果があるのは、学習に意欲をもつ生徒についてだと考えるため。
- ・ICT での学習サポートではなく、生徒と教員の対面コミュニケーションの方が効果的だと考えるため。
- ・直接人と人のつながりが感じられるような指導が大切であると考えているため。
- ・直接、子どもの顔を見て指導を行いたいため。
- ・仲間や友だちと関係性を高めていくことに苦手意識をもっているため、上手にできないことが多いと考えられるため。
- ・保護者に必要ないと言われたため。
- ・学習意欲の低い生徒に対して画面だけ見て理解をすることが難しいと考えるため。
- ・学校に登校する意味を感じなくなり、より登校しなくなる可能性があるため。

### (13)不登校児童生徒への支援に、ICT を活用してどのような取組ができると考えられますか

#### ①ロイロノート・スクールを用いて

- ・教員とのメッセージのやり取り。
- ・クラスの友だちとのやり取り。
- ・朝の健康チェック。
- ・学習課題の送付。
- ・課題の提供や提出・採点。
- ・児童生徒の質問を受ける。
- ・放課後の学習チェック。
- ・板書やプリント、明日の連絡の送付。
- ・自宅で実習を行い、動画を送ってもらう。
- ・課題を提出し、教室の児童生徒とともに共有する。
- ・取りかかりやすい教材を送付する。
- ・家庭学習の進捗確認。
- ・授業記録を残しておくことで、授業の振り返りや復習をすることができる。

- ・毎日の日記に取り組む。
- ・家庭での児童生徒の様子の確認。

## ②Zoomを用いて

- ・オンライン授業により学校に来ている児童と同じように授業を受けることができる。
- ・教室の様子をZoomで見る。
- ・スピーチをする。
- ・会話をする。
- ・道徳や総合、学活などで意見を聞くことで、クラスへの所属感を醸成できる。
- ・朝の会・帰りの会に遠隔参加することで、学校やクラスで何が行われているのか、流れが分かる。
- ・朝の会をZoomで実施することで、身支度を整えて参加するという生活スタイルの確立を推進できる。
- ・休み時間に教室と家庭を中継し、仲の良い友だちと交流できる環境をつくること。

## ③その他

- ・津市 e-Learning ポータルの活用。
- ・教員が薦める教材動画の共有や写真での連絡。
- ・みんなの学習クラブ、スマイルドリルなどの学習教材の活用。
- ・自分で興味のあるものを調べる自由研究の実施。
- ・学習だけではなく、本人の興味・関心のあるものに活用する。
- ・学習支援と同時双方向コミュニケーションによる社会生活への復帰支援。
- ・行事などが苦手な場合、写真や動画で送ることで、様子を知ることができたり、慣れたりすることができる。
- ・YouTube等の勉強系の動画の活用。
- ・NHK for Schoolにある動画を視聴しての学習。

## (14)ICTを活用した不登校児童生徒支援にあたって、課題だと感じることを教えてください (一部抜粋)

- ・タブレット上のやりとりだけでは、学習の機会を与えられても効果があるのか不安。
- ・リアルタイムで授業を受けているわけではないので、理解度に差は出る。
- ・無気力による不登校生徒に対しては、ICTを活用しても学力定着につながらない。
- ・慣れてしまうと学校へ来る意味が見いだせなくなってしまうのではないかと。
- ・本人のつまずきに合った細かな指導が難しい。
- ・保護者の理解・協力が必要。
- ・家庭環境によっては、ネットワークが用意できない。
- ・家庭によっては、タブレット等の機器の保管や取り扱いが心配である。
- ・家族以外の人との関わりの減少。
- ・直接コミュニケーションをとる機会が減ってしまうことを避けたいと思う。
- ・教員の業務の激増。人手、時間的余裕がない。
- ・教員間で差ができることが心配。
- ・限られた時間の中でその子どもの生活リズムに合った学習支援が難しい。
- ・オンライン授業で他の顔を映せないなど、肖像権の問題が難しそう。

- ・オンライン授業で課題の提示や感想の共有などを学級にいる子どもたちと同時進行で行うことが難しい。
- ・ICTを使うことで、不登校児童の負担になってしまうかもしれない。
- ・ICT機器のトラブルがあった場合にすぐに対処できない。
- ・機器を使うことが苦手で、設定などを一人ではできない児童生徒がいる。
- ・タブレットを使いすぎると、目が休まらないのではないかと思う。
- ・家庭で授業を受けるので、気が緩みがちになること。学校と一緒にという意識をもたせることが必要。

(15)ICT全般に関わって、ご意見等ございましたら、ご記入ください（一部抜粋）

- ・利便性は非常に高いが効果が果たしてそれに見合っているのか、疑問に感じる。
- ・ICTは異質な安心感を生徒、保護者、教員に与える危険性がある。
- ・教員の負担への配慮が欲しい。
- ・まだ分からないこともあり、不安を感じる。
- ・学校のタブレットを私的に使う可能性も出てきて、管理の難しさを感じる。
- ・教員1人に1台タブレットもアカウントもないため、環境整備が必要。
- ・児童の操作画面を教員側から見られる機能があれば、持ち帰り等に対応しやすい。
- ・パスワードの入力が煩わしい。
- ・効果的な活用方法を教えてほしい。
- ・タブレットの不具合が多く、壊れやすく対応が大変。
- ・各家庭の状況にもよるが、回線の弱さはICT活用を進めづらくしているような気がする。
- ・SIM内蔵の端末が貸し出せると知識が乏しく余裕のない家庭でも利用しやすいと思う。
- ・保護者からの要望（Zoom授業を受けたい等）にどこまで対応するのかの線引きが難しい。
- ・個々に応じて課題はありますが、タブレットを1人1台持たせてもらったことで、日常的な連絡や板書の写真を送ったりできるので、児童によっては大いに効果的だと感じている。
- ・児童とつながりやすく、非常に便利である。
- ・タブレット導入により、児童一人一人の学習意欲の高まりと、個に応じた学習の取組ができるため、とても感謝しています。ありがとうございます。
- ・学校とのつながりが全くなかった状態からICTの活用でつながりをもつことができ、とても大きな変化を起こすことができたと感じている。保護者の方もICTの活用にとっても喜んでもらっている。

3 「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」のまとめ

「(3) 普段の授業や支援でタブレットをどの程度活用していますか」という質問では、56.7%の教員が毎日活用していると回答しており、2～3日に1度活用していると回答している教員と合わせると77.4%となり、今回の調査からもタブレットの活用が進んでいる実態がうかがえる。「(2) ICTを使うことは得意ですか」という質問では、「得意」・「やや得意」と回答した教員が60.9%を占め、ICTを得意とする教員が多い傾向が見られた。一方で40%近い教員がICTに苦手意識をもっており、これらの教員への支援が、ICTのさらなる活用につながると考えられる。

「(1) 先生の年代を教えてください」と「(2) ICTを使うことは得意ですか」という質

問において、相関があるのかを確認したところ、弱い相関があり、年齢が高い教員ほどICTを使うことに苦手意識をもっている傾向があることが分かった。

「(4) ICTは不登校児童生徒の支援に効果的だと思いますか」という質問では、「とても効果的」と答えた教員が16.5%、「どちらかといえば効果的」と答えた教員が74.4%であり、合わせて90%以上の教員がICTの活用を肯定的にとらえていることが分かった。遠隔でもやり取りができる点や自宅で学習ができる点が学校に来にくい児童生徒に対して効果的だと感じている教員が多くいる。

「(5) 当該不登校傾向児童生徒は自宅へタブレットの持ち帰りをしていますか」という質問では、持ち帰りをしている児童生徒が18.8%、持ち帰りをしていない児童生徒が79.9%であり、タブレットの持ち帰りはあまり進んでいない現状が伺える。持ち帰りができない理由として、本人のやる気の問題や万が一タブレットを壊してしまった時の対応、保護者の協力に課題がある等の理由が見られる。タブレットの持ち帰りには、保護者との協力が必要であると考えられる。

「(8) 今年度、不登校傾向児童生徒に対して、ICTを活用した支援を行いましたか」という質問では、ICTを活用した支援を行ったとする児童生徒は21.8%にとどまった。子どもの実態により、活用が難しかったり、家庭の協力が得られなかったりするなどの課題があるものと推測される。中でも大きいのは、本人のやる気の面であり、ICTを活用する段階まで至っていない児童生徒も多い現状がみられる。ICTを活用した支援を行わなかった教員の多くは、家庭訪問を行ったり、電話連絡をしたりするなどして、不登校児童生徒支援を行っている。

「(8) 今年度、不登校傾向児童生徒に対して、ICTを活用した支援を行いましたか」という質問と「(2) ICTを使うことは得意ですか」という質問の間に相関があるかを調べたところ、相関は見られなかった。ICT活用が得意な教員ほど、ICTを活用した支援を行っていると考えたのだが、教員のICTの得意・不得意と実際に支援を行ったかどうかは相関がなかった。教員のICTの得手・不得手よりも、実際の児童生徒の状態がICTを用いた支援が行えるかどうかの大きな要因になっていると考えられる。

次に、「(11) 今後ICTを活用した不登校児童生徒支援を行いたいと思いますか」という質問では、「行いたい」と回答している教員が26.5%、「行いたいのが難しい」と回答している教員が65.2%となり、合わせて91.7%の教員が可能であれば行いたいと感じている。具体的に「行いたい」とした理由を見てみると、教員と児童生徒とのやり取りや、学習支援に役立つことを期待する声が多かった。「行いたいのが難しい」と回答した教員では、本人の意欲や家庭環境、保護者の協力などに課題があり、実施が難しいと感じている教員が多かった。また、教員の負担が大きく実施が難しいことや、ICTを用いた学習の効果を疑問視する意見も見られた。「行いたくない」と回答した教員では、実際に顔を見てコミュニケーションをとることを重視したいという意見やICTを用いることで学校に登校する必要性を感じなくなり、より登校しにくくなるのではないかとといった不安が見られた。児童生徒の状況によって、臨機応変に対応していく必要があると思われる。

アンケート全体を通して、ICTの活用に意欲的な教員は多いが、十分に活用できていない現状があることやICTの活用は不登校児童生徒支援には有効と考えており、可能で

あれば実施したいと考えている教員が多いことが分かった。また、よい活用方法があれば、実施していききたいという意見や、どのような支援方法、活用方法があるのかが分からないという意見も見られ、どのような支援をしていくのが良いか悩んでいる教員もいることが分かった。

このような現状の中、支援方法や取組例が掲載されている「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」があることで、教員の支援の手助けとなり、教員の負担軽減やより効果的な支援につながると考えられる。

#### IV ICTを用いた支援方法の検証

「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の作成に向けて、前述の「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」で得られた実践や他自治体の取組などを収集した。そして、そのうちのいくつかの支援方法について、実際に児童生徒への支援を実施または観察し、その支援方法について検証を行った。

研究を行うにあたっては、津市教育支援センター及び市内4校の小中学校に研究協力校として協力いただいた。ここでは、そのうち5つの事例を紹介する。

##### 1 実践例(1) 「クイズのやりとり」

(1)ねらい「担任の教員と不登校児童とのつながりをつくる」

(2)使用ソフトウェア ロイロノート・スクール (学習支援クラウド)

(3)取組内容

小学校4年生と3年生の2名の不登校児童が担任教員との間でクイズのやり取りを行った。担任教員が不登校児童の興味のある内容をクイズとして出題し、不登校児童がそれに答え、教員が答え合わせをするというやり取りを行った。また、逆に不登校児童が担任の教員にクイズを出題するというやり取りも行った。

(4)学習者の反応

4年生の児童は、自分の興味のある、プロ野球に関するクイズを担任の教員から受け取り、楽しそうに回答をしていた。回数を重ねるうちに、担任の教員からクイズやメッセージが送られてくることを心待ちにする様子が見られた。クイズをきっかけに、今では、学校外での自分の活動を紹介したり、取り組んだ学習内容を送ったりするようになった。また、担任教員からクイズと一緒に送られてくる学習プリントにも取り組み、担任教員に返送するということもできるようになってきた。児童へのインタビューでは、「クイズのやり取りをすることは楽しい。野球のクイズは簡単すぎるのでもう少し難しくしてほしい」と答えた。

また、3年生の児童は、インターネットでなぞなぞを調べ、それを担任の教員に出題するという取組を行った。インターネットでなぞなぞを調べる中で、自分もなぞなぞにチャレンジすることができ、楽しそうに取り組む姿が見られた。より面白い問題、より難しい問題を出題しようとして問題を検索していた。児童へのインタビューでは、「なぞなぞを出題するのが楽しい。なぞなぞを解くよりも出題する方が好き」という発言が聞かれた。また、やり取りの中で、担任の教員に「給食を食べに行く」と伝え、学校に登校することもできた。

## (5) 考察

2人とも担任教員とのやり取りを楽しんでいる様子が見られ、担任と児童のつながりをつくるというねらいを十分に達成できたものと考えられる。はじめはタブレットの使い方等で戸惑っている姿が見られたが、回数を重ねるごとに慣れていき、使いこなせるようになってきた。

なぞなぞの取組では、なぞなぞの問題が載っているWebサイトに直接アクセスできるように添付することで、児童が文字入力をする必要や問題を考える必要がなくなるため、気軽に取り組むことができる。

学習以外でもタブレットを活用することができ、児童生徒の興味・関心に合わせることで、児童生徒の参加を容易にすることができると考えられる。

## 2 実践例(2)「自由研究」

### (1)ねらい「児童生徒の自発的な学習をうながす」

### (2)使用ソフトウェア 検索ソフト (Google)

### (3)取組内容

小学校5年生の児童が自由研究に取り組んだ。本児は、日本の神話の本を読んで、日本の神話に興味をもち、図書館で借りてきた本及びタブレットを用いて、日本の神話について調べ、ノートにまとめるという活動を行った。また、完成したものを担任教員に見せ、コメントをもらった。

### (4)学習者の反応

自分の興味をもったテーマであることもあり、意欲的に研究に取り組む姿が見られた。自分で図書館に行って、神話に関する本を借りてきたり、分からないことがあれば、タブレットで調べたりするなど、主体的に学習に取り組んだ。研究の途中、神話に登場する多くの難読漢字に苦労しながらも、自分の力で研究を完成させることができた。ノートにまとめる段階では、自分の得意な絵を描くことを活かし、登場人物のイラストを描いたり、日本地図を書いて、図で示したりと、見る人が分かりやすく工夫し、丁寧にノートにまとめることができた。

研究後の児童へのインタビューで自由研究に取り組んだことへの感想を聞いたところ「自由研究は楽しかった。神様の名前など、漢字の読み方が難しかったけど、調べていくうちに覚えられるようになった。今でも神様の名前を暗記できている」と答えた。また、タブレットで調べることについて尋ねたところ「旧国名などを調べるときは本の方が探しやすいかったが、分からない単語や神話について調べるときは、Wikipedia や Google が便利だった」と答えた。本児は、自由研究は次もやりたいと考えており、テーマは考え中とのことであった。自由研究を楽しんでいる様子が見られた。

## (5) 考察

自分から学習をすることができており、ねらいは達成できたと言える。今回、実践を行った児童に関しては、偶然にも日本の神話というテーマに興味をもち、取り組むことができたが、児童生徒によってはテーマを見付けることが困難になることが想定される。また、研究中においても、調べ方が分からない、まとめ方が分からないなどの困ったときに保護者や支援員などの周りの人からの手助けがないと研究を途中で

断念してしまう可能性もある。自由研究を行うにあたっては、初めのうちは周りからの支援が必要となる。

今回の取組で作成した作品は担任の教員にも見せた。本人にその時の担任教員の様子やどんな言葉を返してもらったのかを尋ねたところ、忘れたようであり首をかしげていたが、担任教員へのインタビューでは、「こんなに調べるのは大変だったね」、「みんなが見たら驚くと思うよ」、「すごいね」と声掛けをしたところ、とても嬉しそうだったという。評価をもらうことで、児童の自己肯定感を育むこともできたと考えられる。今回の児童は、絵を描くことを得意としており、それが学習に活かせたという点でも、児童にとってやる気につながり、自信や達成感につながったと考えられる。

完成した作品は、担任教員によってクラスの他の児童にも紹介され、クラスの児童も興味を示したという。作品を通して、クラスの児童ともつながるきっかけにもなると感じた。

今回の児童は3週間をかけて、研究に取り組んだが、負担が大きいと感じる児童生徒も多いと考えられる。研究に何日間もかかる大作でなくとも、少しでも興味をもったことを調べ、担任教員に報告するだけでも、十分な効果が得られると考えられる。スモールステップでできることから始めると良いのではないだろうか。

### 3 実践例(3)「Scratchの活用」

(1)ねらい「プログラミング的思考を育む」

(2)使用ソフトウェア Scratch

(3)取組内容

小学校3年生の児童がプログラミングソフトであるScratchを用いて、プログラミングを行った。主にゲームの作成に取り組み、おみくじゲームや横スクロールゲームなどの作成を行った。作成したゲームは、周りの人や担任の教員にもチャレンジしてもらった。

(4)学習者の反応

はじめは簡単な動きをする作品であったが、今では複雑なゲームをつくることができるようになってきている。動きに合わせて音楽を流したり、背景が変化したり、ゲームにチャレンジする人が楽しめるように工夫する姿が見られた。また、ゲームの製作途中でも「どう思う？」と周りの人に尋ね、レビューをもらったり、何とかクリアできるレベルになるようにゲームの進行速度等を微調整したり、他人の作品鑑賞も積極的に行い、面白いと思ったアイデアを取り入れたりするなど、より良いゲームになるように努力していた。途中、自分の思っているようにゲームが動作しなかったり、どうしたらいいのか分からなかったりすることで、癇癢を起してしまうこともあったが、全体を通して楽しそうにプログラミングに取り組んでいた。

児童へのインタビューでは、「Scratchは3年生から始めたけど、めっちゃ楽しい。他の人がつくったやつで遊べるし。これからも一生やっていきたい」と熱く語った。また、担任の教員に見せた時の教員の様子について聞いたところ、「先生は、驚いていた。先生に『すごい!』って言ってもらえてうれしかった」と答えた。

#### (5) 考察

児童がScratchを始めたのは、今年からだというが、今年から始めたとは思えないほど、Scratchの技術が高いと感じる。作成するゲームの質も、日に日に向上しており、プログラミング思考はもちろんのこと、技術的な面でも十分な力をつけており、プログラミング的思考を育むというねらいを十分達成できたものと考えられる。

担任の教員へのインタビューでは、学校に登校した際には、クラスの友だちにScratchを教えてあげているといい、やり方が分からない子に優しく声をかける姿も見られたという。友だちとコミュニケーションをとるための話題としても役立っているようだ。

担任の教員は、プログラミングの力は、その子の個性なので、伸ばしてあげたいと考えており、将来の仕事につながることも期待している。

今回の取組では、プログラミング的思考だけではなく、創造力や自己肯定感なども身につけていると感じた。学校に登校できなくても児童生徒の力を伸ばす有効な手段のひとつであると考えられる。

### 4 実践例(4)「学校の様子を児童生徒へ送る取組」

(1)ねらい 「児童生徒が学校の様子を知ることにより、学校復帰の手助けとしたり、安心感を与えたりする」

(2)使用ソフトウェア ロイロノート・スクール (学習支援クラウド)

(3)取組内容

教員がロイロノート・スクールを用いて、不登校児童生徒に明日の予定を送付したり、その日の授業での板書を写真に撮り送付したり、学校での活動の様子を写真に撮って送付したりするなどし、学校の様子が児童生徒に伝わるようにした。

(4)学習者の反応

児童生徒に明日の予定やその日の授業の板書を送る取組をしている教員は多く、研究協力校では、筆者の把握している範囲で15名の教員が取り組んでいる。教員に話を聞いたところ、ほとんどの教員が児童生徒にメッセージを送っても、反応がないと答えた。教員の中からは「きちんと児童生徒に届いているのか分からない」という声や、「この取組に効果があるのか疑問である」といった声も聞かれた。

一方、教育支援センターに通う児童生徒にも学校の先生からメッセージや明日の予定、学校の様子などが送られてくるかを尋ねたところ、ほとんどの児童生徒が「先生からの連絡はない」と答え、中には、「タブレットを見ていないので、先生から送られているのか分からない」という児童生徒もいた。しかし、ある児童は「先生からメッセージが送られてきた」と教えてくれた。その児童に気持ちを聞くと「まあまあうれしい」と答え、教員への返信がなくとも、教員からの連絡を楽しみにしているという児童生徒も少数ではあるが、ある程度いるものと考えられる。

#### (5) 考察

学校の教員と児童生徒のつながりが十分ではない現状が分かった。理由としては児童生徒の気持ちによるものが多いと考えられ、タブレットやパソコンを使うといった技術的な問題も考えられる。

しかし、児童生徒の中には、メッセージに返信しなくても教員からの連絡を楽しみ

にしている児童生徒も見られた。教員から連絡があることは、不登校児童生徒にとって、自分が大切にされているという実感にもつながり、メッセージを送る取組は、教員側からは効果を感じられなくても、一定の効果はあるものと考えられる。また、普段はメッセージを見ていなくても、学校に行こうと意欲が湧いたときなどに、メッセージや次の日の予定などを確認できることで、登校支援につながるとも考えられる。

その日の授業の板書の送付に関しても、板書を見ることにより学習ができたという児童生徒は見付けられなかった。保護者には評判が良いが、板書を送っても児童生徒が学習することは難しいようだ。しかし、学校で現在どのような学習を行っているのか、どのような活動をしているのかを知ることができるため、児童生徒に安心感や学習意欲を与えることはできると考えられる。

教員にメッセージを送ってくる児童生徒がほとんどいないことから、児童生徒にとって、メッセージを送ることはハードルが高いと考えられる。それに比べ、メッセージを受け取ることは、児童生徒の負担が少なく取り組みやすいと考えられる。児童生徒が興味のある内容をメッセージに入れるなど、児童生徒がメッセージを見たくなるような工夫をするなど、児童生徒に負担がかからないように、児童生徒に合わせた取組が教員とのつながりを保つ上で必要だと考えられる。

## 5 実践例(5)「家庭などでの様子を学校の担任教員に送る取組」

(1)ねらい 「担任教員に児童生徒の学校外での取組を評価してもらうことで、児童生徒の自己肯定感を高める。また、担任教員が児童生徒の様子を知ること、支援に役立てる」

(2)使用ソフトウェア ロイロノート・スクール (学習支援クラウド)

(3)取組内容

教育支援センターにおいて取り組んだ学習内容や、参加したイベントの様子などをロイロノート・スクールを用いて、担任教員に送付し、それに対してコメントをしてもらった。

(4)学習者の反応

教育支援センターに通う子どもたちに、「教育支援センターでの活動を担任の先生に送ろう」と声かけを行ったところ、担任教員に自分の取組を送りたいという積極的な児童生徒と、絶対に嫌だという児童生徒がおり、児童生徒により差が見られた。

実際に取組を行った中学校3年生の生徒は、高校入試における作文を教育支援センターで考え、その原稿をロイロノート・スクールを用いて担任教員に送った。担任教員は、作文の添削を行い、その生徒に直接届けてくれた。また、別の児童は、教育支援センターで行った木工教室での様子を写真とメッセージで担任教員に送る取組をし、担任教員からは、努力や頑張りを認めるコメントが寄せられた。取組を行ったどちらの児童生徒も自分の頑張りが認められ、満足している様子が見られた。

(5)考察

自分の取組を知ってほしいと思う児童生徒も多く、家庭や教育支援センターでの努力を担任の教員が認めたり、褒めたりすることで、児童生徒の自己肯定感が高まると考えられる。また、教員に報告するという目標があることで、プリントなどの課題に、より意欲的に取り組めるようになると考えられる。

教員に自分の取組を送りたくないと感じた児童生徒には、人と関わることに負担を感じていたり、取組を送ることが面倒くさいと感じたりしている児童生徒も多かった。児童生徒の状況によって、柔軟に対応していく必要がある。

## V 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の作成

### 1 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」について

学校現場の教員が不登校児童生徒支援を効果的に行えるようにするために、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」（資料1）の作成を行った。

この「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」は、7月に実施した「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」の結果及び他自治体の取組を参考に、津市において取組可能と考えられる支援方法を抽出し、一覧表として並べたものである。縦には「つながり・生活支援」と「学習支援」という目的別に2つに分類し、横には、「Zoomを用いた取組」、「ロイロノート・スクールを用いた取組」、「その他の取組」という使用するソフトウェアの違いにより3つに分類している。これにより、児童生徒の状況に合わせて、担任教員が支援方法を探しやすくなっている。

作成した「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」は、研究協力校の不登校児童生徒の担任教員に配付し、不登校児童生徒支援としての活用を依頼した。

そして、研究協力校での実践や、現場の教員の意見収集を通して、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の改訂を行った。改訂においては、似たような項目の統合や項目名の変更を行ったほか、支援の具体例を「支援方法カード」（資料2、3）としてまとめ、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」からそれぞれの「支援方法カード」を閲覧できるようにした。これにより、それぞれの支援方法に具体例が加わり、教員にとって、より理解しやすく、活用しやすくなったと考えている。

（資料1）「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」

	つながり・生活支援	学習支援
Zoomを用いた取組	Z1 教育相談・カウンセリング Z2 学級会への参加    Z3 行事配信 Z4 朝の会・帰りの会への参加 Z5 教室の風景配信    Z6 友だちとの交流	Z7 オンライン社会見学・遠足 Z8本の読み聞かせ Z9 授業配信・授業への参加 Z10 ALTとの英会話    Z11 面接練習
ロイロノート・スクールを用いた取組	L1 家などで取り組んだことの紹介 L2 明日の予定の送信    L3 日記を書く L4 先生とメッセージのやり取り L5 クラスの友だちとメッセージのやり取り L6 しりとり・絵しりとり    L7 クイズのやり取り L8 趣味や興味のあることの紹介 L9 健康観察	L10 授業の板書の送付 L11 問題づくり    L12 質問の受付 L13 授業の録画動画の送付 L14 自宅等での学習のチェック L15 自由研究 L16 プリントや学習課題の送付
その他の取組	O1 見てほしいサイトのURL等の紹介 O2 学習ログの活用・データ集計 O3 VRでのソーシャルスキルトレーニング	O4プログラミング O5 津市e-Learningポータル等の活用 O6 シミュレーションソフト等の活用 O7 NHK for Schoolでの学習 O8 みんなの学習クラブ等の活用

## 2 「支援方法カード」について

支援方法カードは、教員が不登校児童生徒への支援を行う際に役立てられるように、作成したカードで、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」には記載できなかったより具体的な内容が記載されている。

支援方法カードの内容としては、「実施方法」、「活用イメージ」、「使用ソフトウェア」、「支援の概要」、「期待される効果等」、「実施の際の留意点・想定される課題等」という7つの項目に分かれており、教師が見やすいように、要点が箇条書きで書かれている。

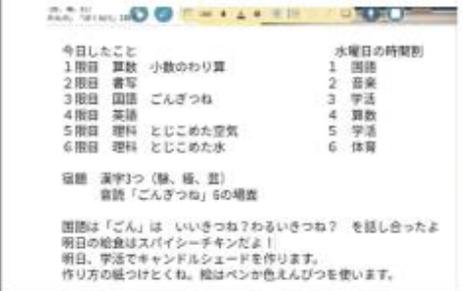
ここでは、一例として、「L2 明日の予定の送信」の支援方法カード（資料2）と「05 津市e-Learningポータルへの活用」の支援方法カード（資料3）を紹介する。

「L2 明日の予定の送信」の支援方法カードは、実践例(4)でも挙げた内容を基に作成を行ったものである。活用イメージは、実際に取組を行っている小学校の教員から提供をいただいたものであり、「期待される効果等」や「実施の際の留意点・想定される課題等」に関しては、教員や児童生徒への聞き取りをもとに作成した。

「05 津市e-Learningポータルへの活用」の支援カードでは、教育支援センターにおいて実施した理科や社会の単元学習の実践などを基に作成を行った。実践では、児童生徒が意欲的に取り組めたことや、評価テストにおいて知識の定着が見られたことなどの成果があった。また、課題としては、パスワードの入力が負担となることや、すぐに質問ができない等の問題が挙げられた。それらの成果や課題を端的にまとめたものが、この支援カードである。

これらの他にも「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」のすべての項目に1つずつ対応した支援方法カードがあり、学校現場において教員がより支援がしやすくなるようになっている。

(資料2) 「L2 明日の予定の送信」の支援方法カード

支援方法	L2「明日の予定の送信」 
活用イメージ	今日したこと 1 科目 算数 小数のわり算 2 科目 書写 3 科目 国語 ごんぎつね 4 科目 英語 5 科目 理科 とじこめた空気を 6 科目 理科 とじこめた水 水曜日の時間割 1 国語 2 音楽 3 学活 4 算数 5 学活 6 体育 宿題 漢字3つ（豚、橋、登） 音読「ごんぎつね」5の場面 国語は「ごん」は、いいきつね？わるいきつね？を話し合ったよ 明日の給食はスパイシーキンドだよ！ 明日、学活でキャンドルシェードを作ります。 作り方の紙つげとくね。絵はペンか色えんぴつを使います。
使用ソフトウェア	ロイノート・スクール
支援の概要	不登校児童生徒にロイノート・スクールを用いて明日の予定を送る取組。予定ととともに、メッセージを添えることや興味のある教科や行事等を強調することなどの工夫ができる。
期待される効果等	・学校の様子を知ることができ、不登校児童生徒の安心感につながる。 ・教員から連絡があることで、児童生徒が大切にされていると感じることができる。 ・児童生徒の登校意欲につなげることができる。 ・明日の予定が分かることで、見通しが持ちやすく、登校しやすくなる。 ・学習内容が分かることで、自宅での学習に役立てられる。 ・担任教員とコミュニケーションをとるきっかけとなる。
実施の際の留意点 想定される課題等	・ほとんどの場合で児童生徒から返信がないと思われる。児童から返信がなくても、メッセージを読んでいる場合もあり、教員からのメッセージを楽しんでいる児童生徒もいる。効果が見えなくても、粘り強い取組が必要となる。 ・学習に苦手意識を持っている児童生徒には、宿題を記載しないなど、その児童生徒に合わせた配慮が必要となる。 ・技術的な問題や気持ちの面でメッセージを見ることができない児童生徒もいる。保護者にメッセージを開いてもらう等、保護者と協力することで対応するとよい。

(資料3) 「05 津市e-Learningポータル」の活用」の支援方法カード

支援方法	05「津市 e-Learning ポータル」
活用イメージ	
使用ソフトウェア	津市 e-Learning ポータル
支援の概要	不登校児童生徒が津市 e-Learning ポータルを用いて学習を行う。
期待される効果等	<ul style="list-style-type: none"> <li>津市 e-Learning ポータルには、様々な学年の教材が用意されており、自分のレベルや学習したい内容を選択して取り組むことができ、学力保障につながる。</li> <li>学習プリントの他、動画などもあり、自分にあった学習方法で学習できるので、学習意欲を持たせやすい。</li> <li>教員が必要なプリントや動画などを用意し、オリジナルのコースを作成することができ、児童生徒に合わせた学習支援ができる。</li> <li>津市 e-Learning ポータル内でメッセージのやり取りや討論に参加することができ、児童生徒の学習やつながりをつくることに役立てることができる。</li> </ul>
実施の際の留意点 想定される課題等	<ul style="list-style-type: none"> <li>津市 e-Learning ポータルの使い方を事前に指導しておく必要がある。</li> <li>ログインの際には、ID とパスワードが必要であり、戸惑うことが想定される。事前に児童生徒に伝えておく必要がある。また、入力が困難な児童生徒には、保護者等に協力を依頼するなど対応が必要である。</li> <li>学習の間に分からないところをすぐに質問できないという課題がある。メッセージ機能などを活用して対応するとよい。</li> </ul>

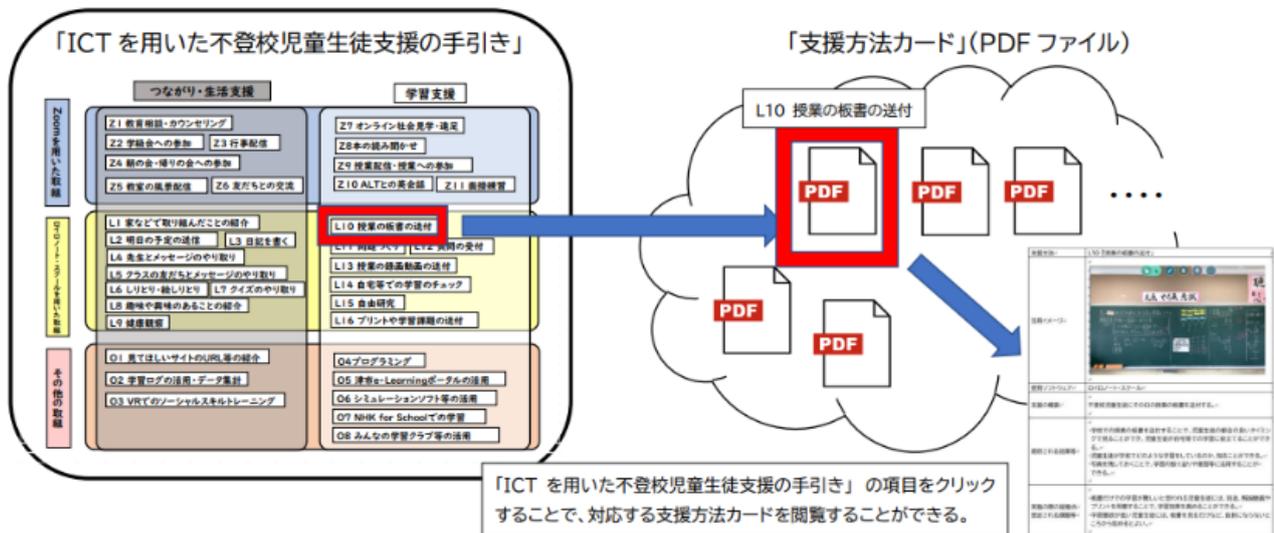
### 3 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の公開イメージ

公開の方法としては、各学校に「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」のExcel ファイルを配布する予定である。このファイルを開くことで「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」を確認することができる。また、この手引きのそれぞれの項目にはリンクが貼られており、クリックすることで、津市e-Learningポータル上に保存されている「支援方法カード」のPDFファイルを開くことができる。(資料4)

(資料4) 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の公開イメージ

(Excel ファイル) ~学校配布~

(津市 e-Learning ポータル)



## VI 事後アンケートについて

### 1 「事後アンケート」について

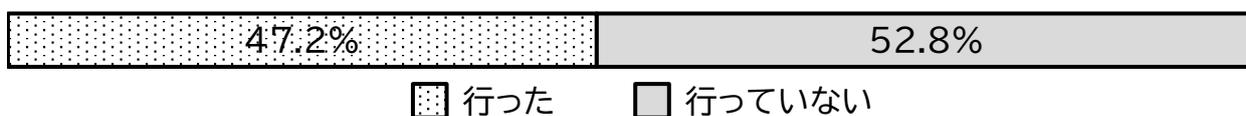
研究協力校におけるICTを用いた取組状況を確認するとともに、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」の効果を確認するために、事後アンケートを実施した。

事後アンケートの対象は、研究協力校の不登校児童生徒の担任教員38名である。今回のアンケートは、主にGoogle Formsを用いてインターネット上で行った。質問項目は全部で4項目であり、以下に質問項目と結果を示す。なお、(1)・(3)の設問は選択式であり、(2)・(4)の設問は自由記述式とした。

### 2 「事後アンケート」の結果

対象教員38名中36名から回答を得た。回答率は94.7%である。

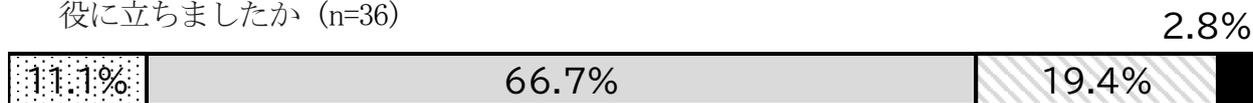
(1) 2学期に不登校児童生徒へのICTを用いた支援を行いましたか (n=36)



(2) 2学期に不登校児童生徒に対して、どのような取組を行いましたか (一部抜粋)

- ・ロイロノート・スクールを使って授業内容などの報告。
- ・翌日の時間割を送ったり家庭訪問の予定を伝えたりした。
- ・Zoomによる授業配信、ロイロノート・スクールによるメッセージ。
- ・学校の様子を動画で送る、学習内容の写真を送るなど。
- ・健康チェックなど定期的なやりとりを促す、時間割等の連絡など。
- ・1人1台タブレットを自宅に貸し出し、入試の際の作文練習に用いた。
- ・簡単な文章のやりとりをロイロノート・スクールを使って行うことを目標にした。
- ・ロイロノート・スクール上の共有ノート内の学級日誌の共有。
- ・ロイロノート・スクールでコミュニケーションを図ろうとした。
- ・授業の板書を撮影し、説明のカードをつけてロイロノート・スクールで送信した。

(3) 配付させていただきました、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」は役に立ちましたか (n=36)



- 役に立った
- どちらかと言えば役に立った
- どちらかと言えば役に立たなかった
- 役に立たなかった

(4) 「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」に対するご感想、ご意見や改善点等があればご記入ください。(一部抜粋)

- ・直接児童に支援することはできず、活用できませんでしたが、大変参考になりました。今後の指導へ活かしたい。

- ・本人があまりタブレットを見ていない様子だったので、取り組むことが難しかった。
- ・家庭環境により、活用できるかできないかが変わってくると思う。
- ・担任する生徒は、それまでロイロノート・スクールを使ったり担任とのやり取りをしたりすることが全くなかった。そのため、今回の取組はあまり大きな役割を果たせなかった。だが、ICTでやりとりができることには興味を示していたので、生徒によっては教員とのやり取りに活用できると期待できる。
- ・自分自身の後学のためには役に立ったが、生徒と接点がもち辛い現在では、有効活用はあまりできなかった。
- ・いただいた資料や教えていただいたことを2学期には取り組ませていただきました。なかなかつながることは難しいですが、また引き続き頑張っていきたいと思います。
- ・今年は利用していないが、不登校生徒と学校とのつながりのために使っていきたい。

### 3 「事後アンケート」のまとめ

事後アンケートの結果から、行ったとする教員が47.2%と半数近い教員がICTを活用した支援に取り組むことができしており、7月に実施した「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」と比較しても、ICTを活用した支援を行った教員が増えている。これは、研究協力を依頼した影響が大きいと考えられる。取組内容としては、ロイロノート・スクールを活用した取組が多く、7月のアンケートと比べても、あまり違いが見られなかった。

「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」に関しては、「役に立った」、「どちらかと言えば役に立った」と回答した教員が77.8%と多くの教員が肯定的に捉えていることが分かった。実際に支援を試みてもうまくいかなかった、実際に活用できなかったという声も多いが、教員がどのような支援方法があるのかを知ることができたという点が評価されたものと考えられる。

## Ⅶ 研究のまとめ

今回の研究では、学校における不登校児童生徒支援について研究を行った。今回の研究の成果としては大きく2点あげられる。まず1点目は、「不登校傾向児童生徒に対するICTを活用した支援に関するアンケート」を通して、津市における不登校児童生徒へのICTを用いた支援の実態を明らかにすることができた点である。2点目は学校におけるICTを用いた不登校児童生徒に対する支援についての検証を通して、教員の支援の手助けとなりうる「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」という手引きを作成することができたという点である。この2点が今回の研究における成果であると言える。一方で、課題としては、実際に不登校児童生徒の支援にICTを役立てることができた事例がほんのわずかであるということである。ICTを活用することで、家庭と学校の離れた場所でも支援を行うことができるが、直接会ったり、連絡が取れなかったりといったような、支援を行える段階まで達していない児童生徒も多い実態が今回の研究で明らかになった。これらの児童生徒はICTに限らず、学校からの支援をなかなか受けることができていない現状がある。このような児童生徒にいかに関心を持って支援を行っていくのが、今後の課題としてあげられる。

今回、学校現場における不登校児童生徒支援について研究を行う中で、学校現場の教員の努力や工夫を知ることもできた。現場の教員は児童生徒に合わせて、様々な取組を行い、児

児童生徒を援助しようとしており、「個別最適な学び」の実現をめざして取組が行われている。

一方で、不登校児童生徒支援の難しさも感じた。今回の研究で支援が継続できている児童生徒をみると、教育支援センターの支援員や保護者などの周りの人のフォローがあってこそ学校からの支援ができています。担任一人の努力では限界があり、保護者をはじめ、周りの大人全体で、不登校児童生徒支援を行っていくことが必要である。

今後の取組としては、「ICTを用いた不登校児童生徒支援の手引き」をいかに公開していくのかを検討していきたい。今回の研究で、この手引きがある程度の効果があることが分かった。教員の中には、「どのような支援方法があるか分からないので、教えてほしい」という声もあり、この手引きが、より多くの教員に認知されることで、すべての不登校児童生徒の支援に役立てることは無理でも、一人でも多くの児童生徒の支援に役立てるようにしていきたいと考える。

最後に、本研究のために御指導・御協力を賜りました、三重大学教育学部 須曾野仁志教授、研究協力校の教職員の方々、教育支援センターの職員の方々に、厚く御礼を申し上げます。

## Ⅷ 引用・参考文献

- 伊藤美奈子『不登校の理解と支援のためのハンドブック』ミネルヴァ書房（2022）
- ウヴェ・フリック『質的研究のデザイン』新曜社(2016)
- 佐藤郁哉『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社（2008）
- 関口靖広『教育研究のための質的研究法講座』北大路書房(2013)
- 宮城県教育委員会『ICT授業活用実践事例集』（2015）  
<https://www.pref.miyagi.jp/documents/2243/371877.pdf> (2022. 12. 5参照)
- 文部科学省 『教育ICT活用事例』（2012）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1407916.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1407916.htm)(2022. 12. 5参照)
- 文部科学省『令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（2022）  
[https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt\\_jidou02-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf)  
(2022. 11. 1参照)
- 文部科学省『やむを得ず学校に登校できない児童生徒へのICTを活用した学習指導等 自治体の事例』  
[https://www.mext.go.jp/content/20220112mxt\\_jogai02000017631\\_000012.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220112mxt_jogai02000017631_000012.pdf)  
(2022. 12. 5参照)